

松任谷正隆の

僕のひとりごと

13

VOL.13 生江さんのこと

前回の続きを書こう。

アマチュアのサークルのオーディションで落ちた僕らに声を掛けてくれたのが生江さんだった、
というところまで書いた。

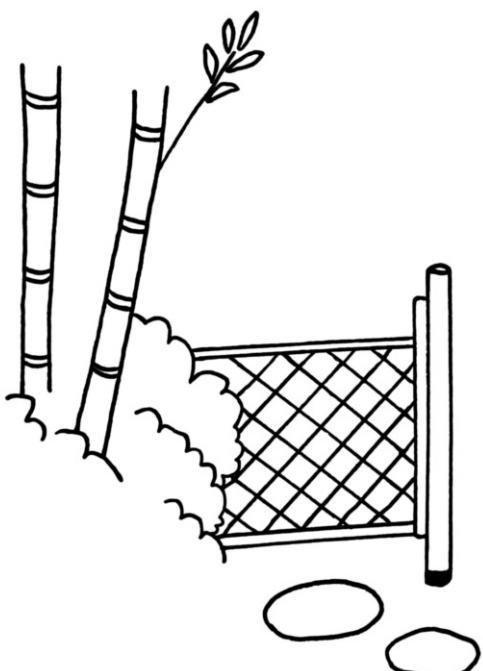
生江さんはこのサークルのレギュラーメンバー。イコールかなり上手い、ということを意味する。

彼の所属しているバンドはブルーグラスのバンドで、彼はギター担当だった。

落選で呆然としている中で、レギュラーメンバーたちの練習が始まり、彼のバンドを見ていると、
どうも生江さんはあまりいい立場にいないのが分かった。

バンドというのは見ているだけで力関係が分かるものである。生江さんはたぶん一番下っ端。

小さくなつてギターを弾いていた。でも、舞台から降りて、僕たちの前に来ると水を得た魚のようになって……
つまりバンドよりよっぽど楽しそうになった。



「今度うちに遊びに来いよ、いろんな奴らが出入りしているからよ」
これがリップサービスではないことは
高校生の僕にも分かったのだろう。
それから間もなくして、家が近いこともあって、
僕は一人で生江さんのお宅にお邪魔するのである。
そうそう、当時生江さんは慶應の文学部、心理学科3年生だったか。
僕は慶應高校の3年生。成績が悪く、
行けるとしたら法学部政治学科か、文学部だけだった。
文学部も悪くないな、と思ったのは生江さんのせいだ。

生江さんのお宅は仙川にあり、
畳張りの離れみたいになった部屋が生江さんの、
そして仲間達の集まる場所だった。

初めて行った日からなんだか居心地が良かったのは、高校生なのにガキ扱いされなかつたからだろう。

思ひだしてみると変な部屋だった。

金髪のでかい人やら、やたら理屈っぽい人やら、多国籍人種（に見える人たち）がうろうろ。

みんな好き勝手に台所に入り込み、好き勝手に冷蔵庫を開けていた。

こんなことがこの家では許されるのか・・・とショックを受けた。

「おまえも好きなものを勝手に飲め」と言わされたが、さすがに気が引けてそれはやめた。

この家では僕は精一杯背伸びをしていたと思う。

それはもちろん大学生たちと対等に話したいがためである。

対等に話が出来たと思ったときには自分がそうとう大人になった気がした。

こういう場所に比べればガールフレンドなんてたいした意味もないな、と思った。

そう、ガールフレンドのことで悩みもあったのだが、生江さんの家に行けばそんなことどうでも良くなつたのである。

あの部屋は8畳くらいだったのだろうか。僕が行くときには最低でも5人は先客がいた。

半分くらいは桐朋学園の演劇部の人たちだったそうだ。

それもそのはず、お父さんが桐朋の理事長。

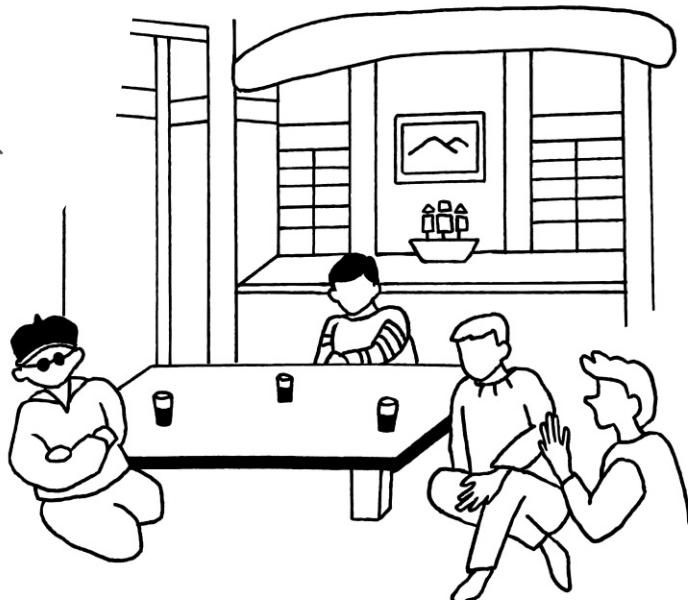
生江さんも桐朋出身だったわけだから。

そうそう、なぜ生江さんだけ実名で書いているのか、

理由を話すべきか。

それはその後、彼は三井不動産に就職し、

三井ホームの社長にまでなつていったからである。



松任谷 正隆（まつとうや まさたか）

作編曲家、音楽プロデューサー。

4歳からクラシックピアノを習い始め、14歳の頃にバンド活動を始める。

20歳の頃プロのスタジオプレイヤー活動を開始し、

バンド“キャラメル・ママ”、“ティン・パン・アレイ”を経て、数多くのセッションに参加。

その後アレンジャー、プロデューサーとして多くのアーティストの作品に携わる。

鈴木茂、小原礼、林立夫とともにバンドSKYEを結成。

2021年10月、デビューアルバム「SKYE」をリリース。

日本自動車ジャーナリスト協会に所属し、「日本カー・オブ・ザ・イヤー」の選考委員も務める。

著書に「松任谷正隆の素」「おじさんはどう生きるか」などがある。

イラスト：W.Valy